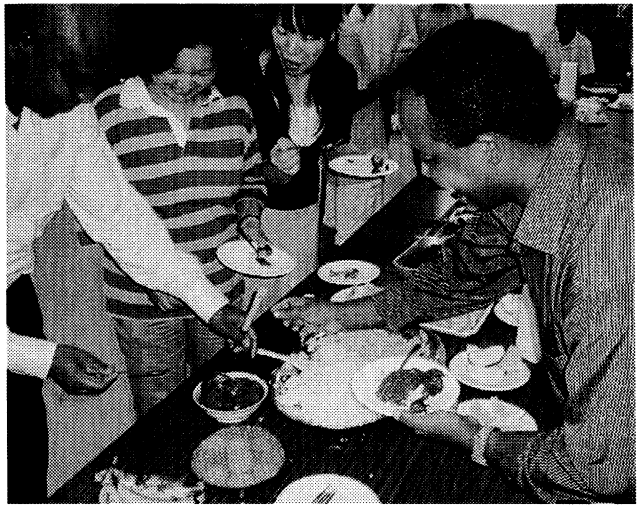
# 異文化と心通わせ

つくば通信 ㉑

村田　佳子



先日、大学時代の友人から、米国人のホームパーティーに呼ばれ、「今から行くところなのだけれど、何を持っていけばいいだろう」という電話をもらいました。友人は元アメリカンフットボール選手で現在は航空自衛隊で活躍しています。昨年はイラクの復興支援でクウェートにも勤務しました。これまでも海外での訓練などで異国の文化に触れつつ、そんな中で出会った方のお宅に初めて行くところでした。

私も職場で催されるカジュアルなものや友人宅でのアットホームなパーティーに呼んでいただくことがあります。一品ずつ持ち寄りということもあれば、催す方がご馳走を用意してくれることも。私は飲み物を持っていったり、リクエストされたデザートを買っていったりします。また、中にはお花や自分の国の珍しいお菓子などを持ってこられる方もいます。庄内の地酒や枝豆などを持っていき、喜んでいただいたこともあります。

電話のあったその日、友人には「お気に入りのお酒やお花、お子さんがいればお菓子などはどう？」と薦めてみました。

## この時期、ちょっと出かけてみた先には…

するとパーティーの後、持っていったワインがずいぶん喜ばれたこと、大きな七面鳥の料理もおいしく、久々の英会話もアルコールが手伝って滑らかにできた、また行ってみたいとの楽しい報告のメールをもらいました。

忘年会などさまざまな集まりが催される季節になりました。人が集まる場が得意な方ばかりではないでしょう。知らない人の中でどんな風に振る舞ったらいいか分からないから億劫になりがちです。しかしながら会場にはそういう方は結構いて、同じ気持ちの者同士、声を掛け合うとホッとして意外に話が弾むことがあります。

私も知り合いがいない集まりに参加したときに声をかけてもらったことがきっかけで、後々親しくさせていただくようになった方がいます。

### なごやかな雰囲気の持ち寄りパーティー

米国の研究所に勤める友人が帰国した際、パーティーを通じて得た経験を話してくれました。隕石の研究のためワシントンDCの研究所に勤める彼女。勤務先の伝統的な行事でもある、ランチクラブが近づくと少々気が重くなるそうです。ランチクラブとは一人が全員分（約20人）のランチをローテーションで作るという、ここの伝統。研究学会などがない限りだいたい2カ月に一度、2、3日連続でその日が回ってくるそうです。

宗教上、菜食主義の方や、豚肉を食べない方も（何を作ったら喜ばれるだろう。日本風を取り入れようかな、でも皆の口に合うかな）。日々の昼食代の節約や研究者間でのコミュニケーションの時間を設けるために始まったそうですが、順番のときは大変でも、作る段取り、ない材料は別のもので補う工夫など研究者として育っていく上で鍛えられていると前向きに話します。そしてランチで出会えた仲間が実は似ている分野で異なるアプローチをしている人と知り、進捗状況を話し合うこともできたそうです。彼女にとっては外国語である英語で、たわいのない話も笑ってできるようになったと教えてくれました。

昨年のクリスマスには研究所の所長の大きなお宅で盛大なホームパーティーがあったそうです。

「億劫だな…って思わなかった？」と聞くと「12月は連日パーティーがあって実際疲れるかなと思ったけれど、自分を鍛えるつもりで頑張って全部出てみた」と。ドレスアップしたスタッフたちと歓談を楽しめた様子でした。人を喜ばせたり、びっくりさせたりするのが得意な彼女。日本にいるときには経験できなかったことを通じて、新しい自分にも出会えたそうです。そして今では「将来、パーティーを催してスタッフを喜ばせる、そんな研究者になりたい」と話してくれました。

この季節、パーティーはちょっと億劫という方もいらっしゃると思いますが、雰囲気を味わうだけでも気軽に出かけてみてはいかがでしょうか。来年につながるいい出会いがあるかもしれません。

（鶴岡市出身、JICA筑波国際センター・クリニックコーディネーター）